

今回の特集は、京浜歴史科学研究会の「**神奈川県史**」を学ぶ会・**幕末開港編**」において、黒船来航以前の海防についての史料を学習した一九八八年二月例会から一九九三年五月例会に至る六年間の成果をまとめたものである。

私が「**幕末開港編**」に参加して『**神奈川県史 資料編10 近世7 海防・開国**』を読みはじめたのは、大学で日本史専攻に進んだばかりの頃であった。当時は、史料を読んでいく過程で出会う「**事実**」――たとえば、台場の築造にともなう利権をめぐる争う「**しただたかな**」民衆の姿――に驚きをおぼえた。それとほぼ時を同じくして、それまで自分が興味をもって読んできた研究が、海外の研究の問題意識と理論的枠組をあまり吟味せず、そのまま日本の史料に適用したものだと考え始めていた。そのため、先ず史料に沈潜して、そこから出発する以外にどんな歴史研究もありえないと痛感し、とにかく史料に沈潜しようと考えた。その一方で、史料から出発するということと「**問題意識**」を持って研究することとを自分の中でどのように関連づけたらいいのか、また、既成の学説では説明できない史料の中の「**事実**」をどのような理論的枠組によって説明したらよいかについて、あれこれと考え続けていた。今回、総括的論文を書き、編集を担当してみて、こうしたかつての自分を思い出した。もう何年も前のこととなってしまったとはいえ、自分は今も同じ場所を歩き回っているような気がする。

どのような研究にしても、一人の研究者の頭の中で「**純粹培養**」されて出来るものではないことはいうまでもない。このことも改めて痛感した。その意味でも、本会の共同研究の成果である本特集について、読者諸氏の忌憚のない御批判を乞う次第である。

(松田隆行)

京浜歴科研年報 第二号

発行日 一九九八年一月二五日

編集・発行

京浜歴史科学研究会

〒二三三-〇〇〇六

横浜市港南区芹が谷五-五九-一二

大湖賢一方 Tel〇四五-八二五-三七三六

(郵便振替口座) 〇〇二七〇-八-一五五三三五

印刷 合資会社 横 大気堂

横浜市中区真砂町四-四〇